

三河国分寺跡の発掘調査の概要

— 遺跡見学会の資料にかえて —

三河国分寺跡の確認調査も、今年で2年目を迎えました。昨年の東回廊・東面築地の発見に続き、今回の調査では北面築地・西面築地が確認され、また、現国分寺本堂前では、金堂もしくは講堂となる可能性の高い基壇状の高まりも発見されています。このように、奈良時代には国の華とうたわれた大寺院が私たちの前に姿を現してきたわけですが、皆さんも現地で古代の息吹に触れながら、かつての国分寺の姿といったものを頭に描いてみたらどうでしょうか。

1. 発見された遺構^{いこう} (第1図参照)

〈昨年の概要〉

- ・ 回廊跡^{かいろう} (建物をつなぐ屋根つき廊下)

F及びHトレンチにおいて確認しました。三河国分尼寺と同じく^{こじ}複廊^{ふくろう}(壁をはさみ両側通行)です。

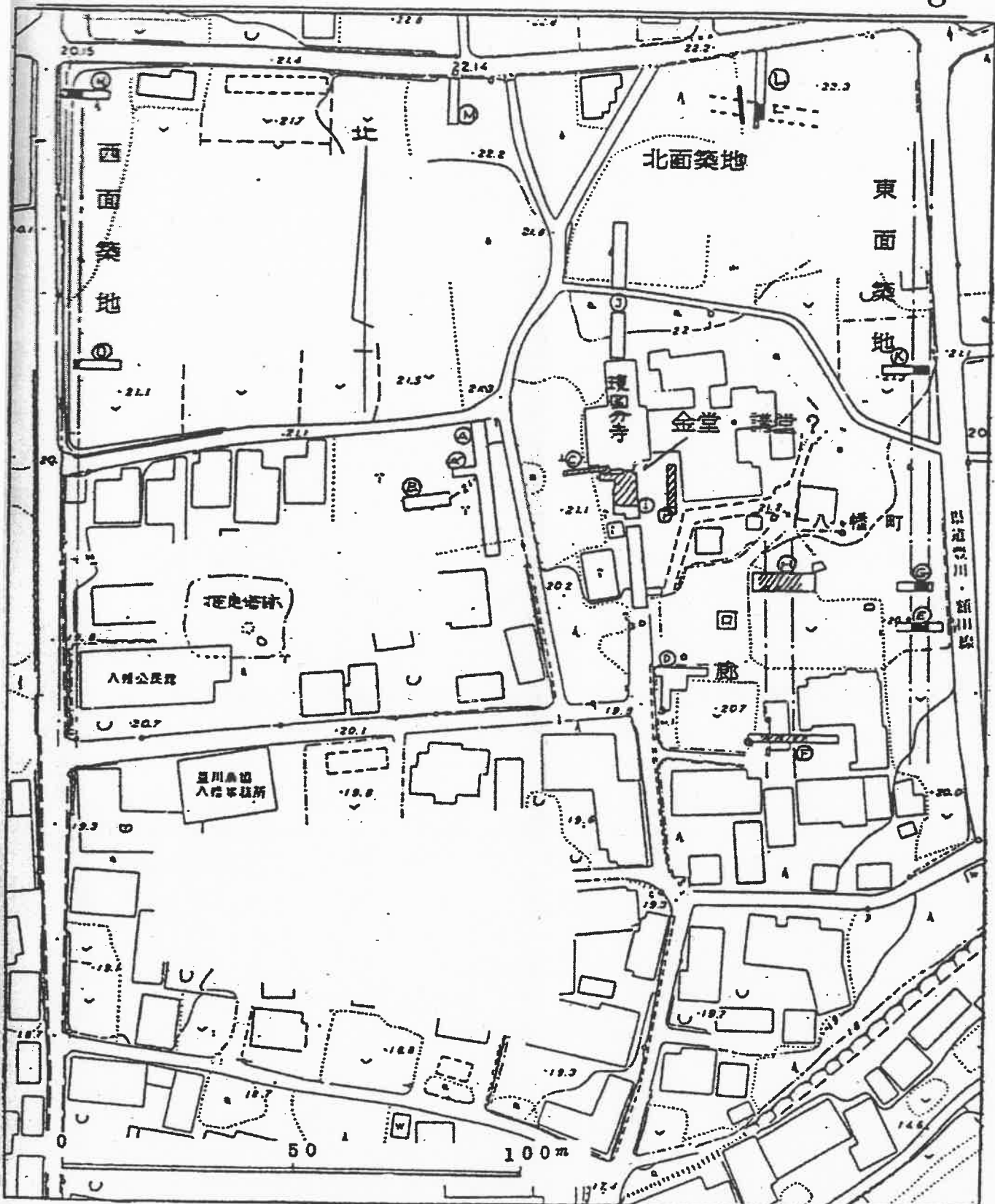
- ・ 東面築地^{ついで} (築地とは、寺を囲む瓦を葺いた土塀です。)

E及びQトレンチにおいて確認しました。^{きていぶ}基底部の幅は3m強の規模です。

〈今年発見された遺構〉

- ・ 東面築地

昨年のE、Gトレンチより約60m北側のKトレンチでも築地塀^{しんぼく}の跡が発見されました。ほぼ真北方向に延びており、寺域の東限を画しています。なお、内側の溝からは屋根より落ちた多量の瓦が出土しています。



第1図 全体図及びトレンチ配置図

A～Hトレンチは昨年度調査（今は埋め戻してある）
 I～Pトレンチは今年度調査

・北面築地

Lトレンチにおいて確認されました。しかし、Mトレンチにおいては確認されず、^{おとし}武蔵国分寺のように変形した寺域で構成する可能性もあります。

・西面築地

N及びOトレンチにおいて確認されました。^{どらい}土塁の下から発見され、土塁は後の時代（戦国時代？）に作られたものであることが判明しました。

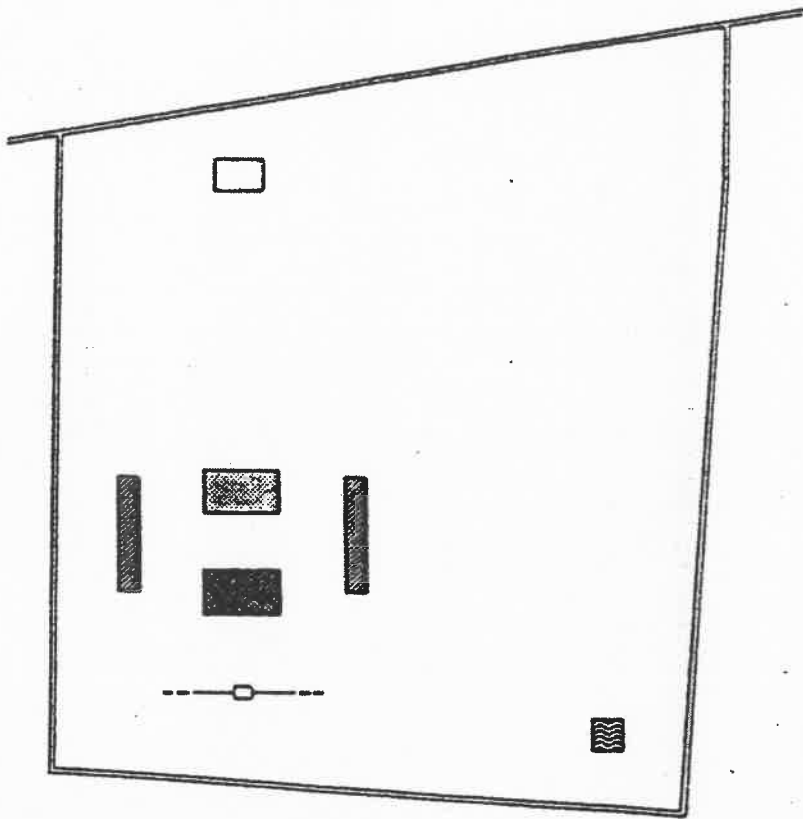
◎中心伽藍（伽藍とは、寺の中の建物のこと）

今回の調査では、I及びJトレンチあたりに主要伽藍が配されることを想定してトレンチを設定しました。その結果、金堂もしくは講堂となる可能性の高い^{きどん}基壇状の高まり（地山を削り出す）が本堂前のIトレンチにおいて検出されています。^{そせい}礎石は一つも発見されていませんが、礎石を据えるために穴を掘って小石を配する^{おとし}根石の跡と考えられる穴が1か所で確認されており、もしかしたら現国分寺本堂の下には、奈良時代の礎石がそのまま眠っているかもしれません。

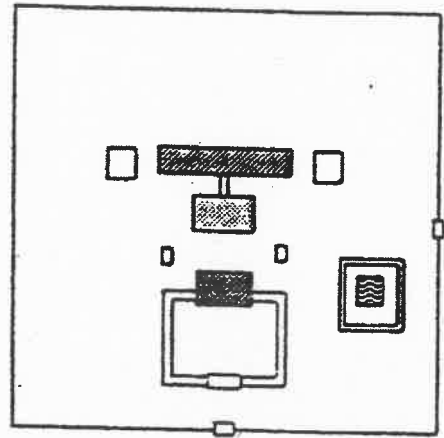
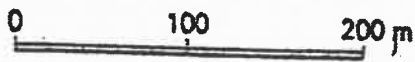
2. 三河国分寺の伽藍配置

国分寺の伽藍配置は、各国によって様々です。右の図が各国の国分寺の伽藍配置ですが、三河の国分寺はどうでしょうか？ 塔跡や回廊の位置などを考えながら、皆さんも自分で、三河国分寺の伽藍配置を想像してみてください。

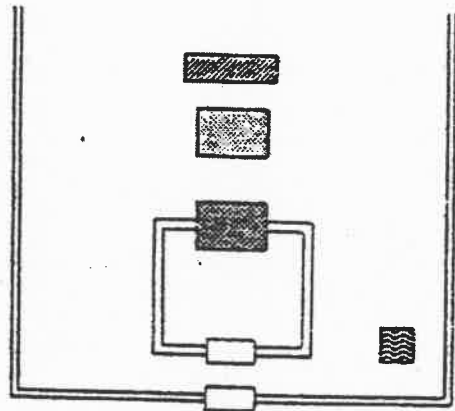
なお、今年の調査で寺域の東西幅が600尺強＝約180m（^{てんびょう}天平尺1尺は約29.7cm）であることが判明しました。今後、調査が進むにつれて、より明瞭な三河国分寺の全体像が浮かび上がると思いますが、来年も引き続く予定の今後の調査に期待したいものです。



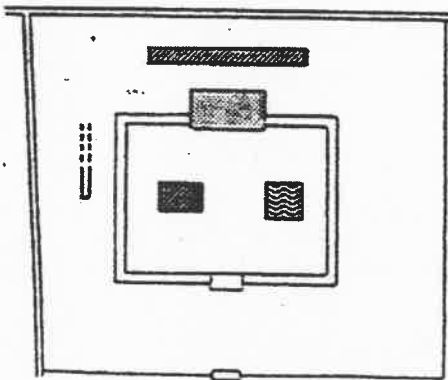
武蔵国分寺



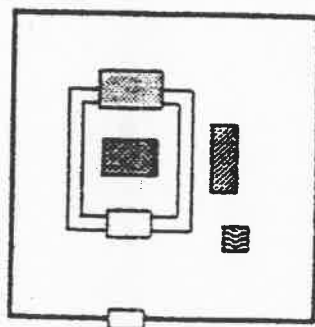
陸奥国分寺



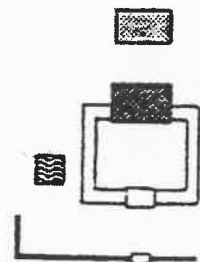
越前国分寺



美濃国分寺



伊勢国分寺



遠江国分寺



第2図 様々な国分寺の伽藍配置

3. 三河国分寺跡出土遺物

国分寺を代表する遺物は、なんといつても瓦です。特に軒瓦の文様はのきがわら もんよう各国分寺に独特の文様があり、いわば国分寺の顔ともいえるでしょう。また、これらの瓦は、一枚だけでも非常に重量があり、両手でかかえる程の重さがあります。

<瓦>

- ◎ 軒丸瓦のきまる（第3図 1. 2 軒先につく、文様のある丸瓦です）

三河国分寺だけでも何種類も存在し、ここには2種類たくほんの拓本をあげておきました。1. 2ともにKトレンチ（東面築地）からの出土です

- ◎ 軒平瓦のきひら（第3図 3 軒先につく、文様のある平瓦です）

このタイプがもっともポピュラーで、多量に出土しています。Lトレンチ（北面築地）から出土しました。

- ◎ 鬼瓦（第4図 4）

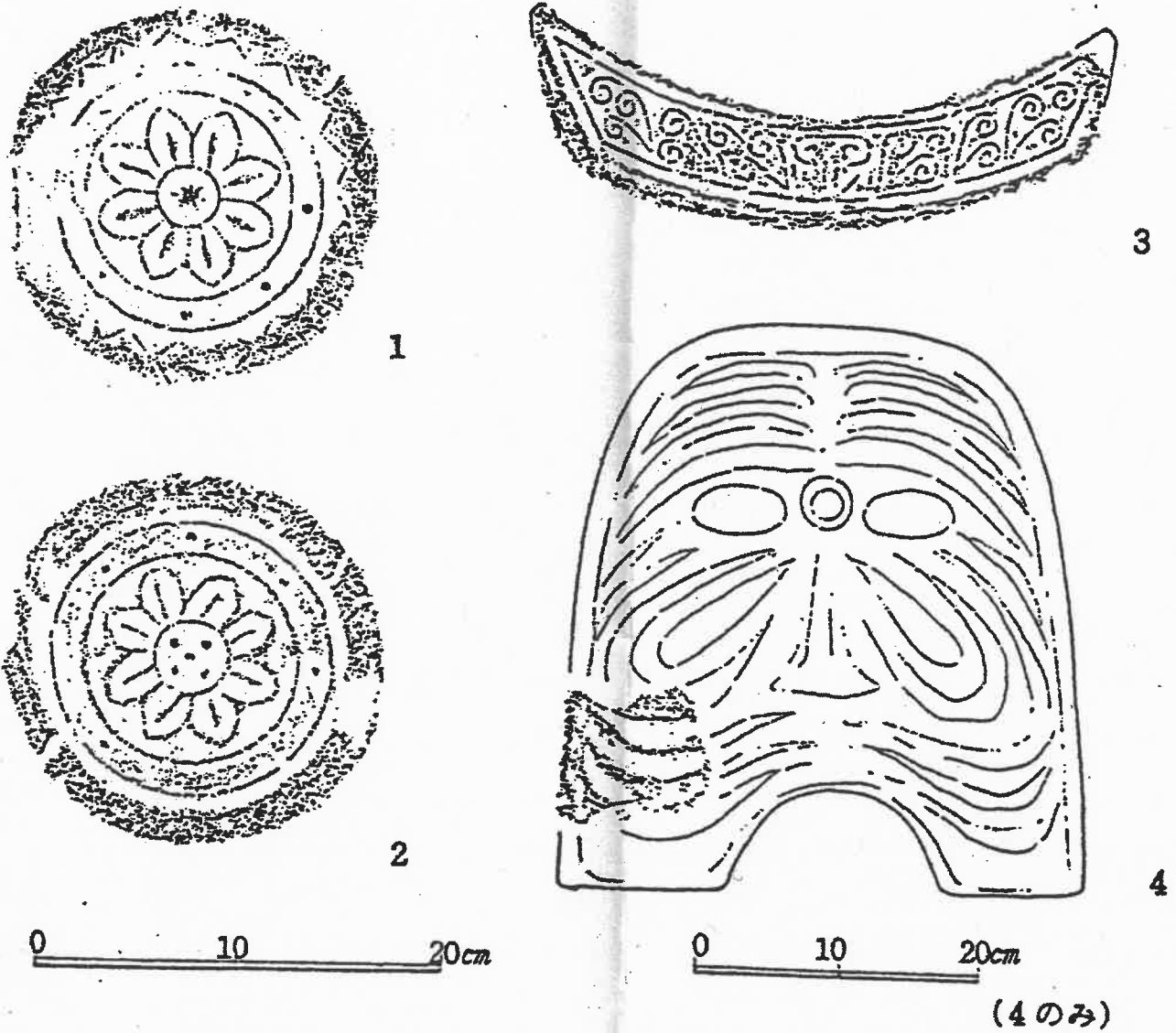
右のほほのヒゲの部分の破片がLトレンチより出土しました。三河国分寺出土のもの（地域文化広場に展示中）と同范どうはん（同じ鋳型）である可能性が高いと言えます。

- ◎ 塼せん（瓦質のレンガのようなものです）

ほとんどのトレンチで完形品や破片が出土しています。築地塼にも使用されていたと考えられて注目されています。

<土器>

奈良時代から平安時代にかけての須恵器すえき・灰釉陶器かいゆうとうきなどが多く出土しています。いずれも捨てられたもので、完形品は一つもありません。また、この他、奈良時代以前では弥生時代後期やよいの土器が、国分寺廃絶以後では、中世と近世の土器が出土しており、三河国分寺跡は複合遺跡ふくごうだといえます。



第3図 三河国分寺跡出土瓦

1. 単弁蓮花文軒丸瓦 (中房に星形)
ほしがた
2. " (中房に1 + 4 = 5個の蓮子)
なんし
3. 均正唐草文軒平瓦 (藤手状の唐草文)
わらびて
4. 鬼瓦 (右ほほのヒゲの部分・全体形は尼寺出土品で復元)